

# 「主はわたしの牧者」

私達は二週前にダビデの生涯を見ました。そして、これから数回に分けて、彼が作った世界で最も有名な詩を一つ、ご紹介します。この詩は病院の待合室に飾られ、映画の中に出てき、この一節を入れ墨としている人もおれば、墓石にこの一節を刻んでいる人もいます。私はこの詩を天に召されていく方の耳元でこれまで何度、読んだことでしょうか。

**1 主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。2 主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。3 主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。4 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。5 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれまぬ。6 わたしの生きていくかぎりには必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう（詩篇23篇1節－6節）。**

ダビデは母の不義の中、エッサイの八番目の末っ子として生まれたとお話ししました。おそらく親兄弟からあまり気かけられることもなく、幼少の時から誰に言われるまでもなく、野原で羊の面倒を見てきた人です。人と話すよりも羊に話しかけることのほうが多い毎日、変哲もない単調な日々を過ごしていたというのがこのダビデです。何も考えずに野原で10年を過ごすこともできます。しかし、彼はその野原で神と自分との関係を見出し、それを言葉に残したのです。すなわち天から届く神のメッセージは私達の日常生活の中に本来、満ちているものであり、ただ私達に必要なのはそのメッセージを受け止める霊的な感性なのです。

この詩篇23篇はこう始まります。『**1 主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない**』

おそらく多くの皆さんはこの詩をそらんじるほどによく知っているかと思います。しかし、慣れとは怖いもので、そらんじてしまうと大切なことに気がつきにくくなります。この言葉のどこが大切なのかと思われる方がいるかもしれません。しかし、ここには私達の人生を全く別のものとしてしまう言葉が書かれています。こういうことです。ここには「主はわたしの牧者です」と書かれています。それでは、そのまま単純におたずねします。「主は本当にあなたの牧者ですか」。

はたして主は本当に私達の牧者なののでしょうか。もしかしたら私達は「主はわたしの牧者です」とそらんじながら、実はそれは建前であり、本音と言えは「わたしの牧者は自分以外にはありえない」とばかりに生きてはいないのでしょうか。ダビデについて考えてみましょう。かつての彼は少年でありながらも委ねられている羊の面倒を見る牧者でした。彼の毎日はその羊達をどのように養えばいいのか、どのようにして羊達を守ることができるのか、毎日、その一点に向けられていました。そして、これらのことを実現するために彼は自分がすべきことを知っていました。先日、お話ししました巨人ゴリアテを倒した「石投げの技術」もダビデが自分では身お守ることができない羊を獣から守るために会得した彼の業でありました。

ダビデが羊たちに対して「自分は牧者として何をしたらいいのか」ということを知っていたということは、すなわち彼が「羊のことをよく知っていた」ということです。そして、あえて一言で言いますのなら羊は自分達だけでは生きることができない動物なのです。ゆえに彼らは昔から「家畜」として人によって守られてきたのです。羊は近視眼的で遠くを見ることができず、羊は自ら牧草を探しあてることができず、早く走ることも、自らの身を守る牙や爪もありません。潤沢な毛皮を身にまとっていますが、その毛づくろいを自分ですることができず、いつもその毛は泥にまみれています。極めつけはだれかがその毛を刈ってくれなければ彼らは自らの毛の重さで歩くことすらできなくなるのです。少年ダビデの牧者としての仕事はこの羊を守り、この羊を養うということでした。そして、彼の霊的な感性はそれらの「羊」を「人間」に置きかえ、「牧者」を「神様」に置き換えたのです。

後にダビデはイスラエルの王としてその実権を握る前に敵に追われて逃げていたことがありました。そんな絶体絶命のある日、彼は自ら狂った様を装って命からがらその場から逃げたことがあり、その時に彼はこんな言葉を書き残したのです。

**『若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない』**（詩篇 34 篇 10 節）。

若さというのはそれだけで尊いものです。その時、私達の心身には溢れんばかりの力がみなぎるのです。若さは時に不可能と思われることを可能にしてしまう力を秘めたものであります。しかし、ダビデはそのような若い獅子も乏しく飢えると言いました。

またダビデは油を注がれたイスラエルの王となった後になっても自覚していたことがありました。「わたしは油の注がれた王であるけれど、今日なお弱い。ゼルヤの子であるこれらの人々はわたしの手におえない」（サムエル下 3 章 39 節）。彼は王でありながら、自分の力のおよばないところがある、私の力をもって全

くどうすることもできなことがあるのだ、故に今も私は弱いというとその心中を告白しています。

霊の巨人、預言者イザヤは人間というものを総括的に見て、こう書き残したました。『われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った』（イザヤ53章6節）。彼の眼（まなこ）が人間を見た時に、イザヤの目に人間はみな羊のように迷って、おのおのが自分の道に向かっていくものとして映ったのです。それから750年が経ち、イエス・キリストは『また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまされた』（マタイ9章36節）とマタイは記録しています。ダビデもイザヤもイエス様も知っていたのです。羊がさまよう様を、飼う者のない羊が弱りはて、倒れてしまう様を。それは彼らの身近に見ることができる光景であったからです。そして、彼らは皆、その羊の姿と人間の姿を重ね合わせたのです。

これが聖書が言うところの人間の姿です。このような人間観を私は皆さんに押しつけようとは思いません。しかし、牧師という仕事から、人と関われば関わるほどに聖書が言っているところの人間観が私の心の中で内なる確信となっていくことを否定することはできません。

人の歴史において「人間が持っている知的な数値」というものを計測できるのなら、私達は古の人たちよりもはるかに知的な生活を営んでいるのかもしれませんが。その姿には華やかさがあるかもしれません。豊かさもあるでしょう。しかし、我々の心にさしたる進歩はなく、私達は皆、何かしらの弱さや限界を抱えて生きているということ、人の心の奥底まで見通すことができたイエス・キリストがそんな私達を見るのなら、私達の姿というのはまさしく飼う者のない羊であり、弱りはて、倒れているように見えるのです。

私達が神を求める第一歩はまずここから始まるのではないのでしょうか。誰もが自分も愛する者達も乏しくなることを願うことはありません。乏しくならないうちにも自分自身がしっかりとした牧者であり続けるためにめにがんばらなければならないという自負心と共に生きています。ですから私達は一生懸命に働きます。献身的に生きようとしています。その心が優しく、責任感がある人であればあるほどに身を粉にして私達はがんばって、がんばって、がんばります。

しかし、実際にどうなのでしょう。私達が言う、その「わたし」について検証してみると、私達は私達が思い描くような牧者となっているのでしょうか。自信に満ちて誰かの先頭に立っているのでしょうか。五つの質問を自分自身に投げかけてみましょう。

**1) あなたは自分の感情を支配できますか。**

自分の感情を支配するというは大変なことです。自分の感情の浮き沈みによって自分が何をしているのかわからず、またそのことにより互いの間に混乱を招いてしまった、その関係が壊れてしまったというようなことを私達は経験します。まだ善悪の区別ができない幼子を前に怒鳴ってしまう私達は何者なのでしょう。朝は幸せの絶頂、午後は憂鬱にさいなまれ、それによって振り回される人達がいる、そんな私達は何者なのでしょう。感情が安定していなければ、羊は安心して心身をその牧者に委ねることはできません。

**2) あなたは人の関係を常に最善とすることができるか。**

私達の人生において私達が向き合うのは人間です。人との関係こそが私達の喜びであり、また同時に私達の最大の悩みです。私達にとりまして一番、身近な人は自分自身です。私達は自分自身とうまくつきあっていますか。自分の身近な伴侶や子供達はいかがでしょうか。さらには職場や友人達の関係はどうですか。「この人となら」という思いでいた人との関係がいつまでも持続することが難しいことを私達はよく知っています。牧者は羊の間に生じる問題を解決しなければなりません。私達はその牧者の役目を全うすることができるのでしょうか。

**3) あなたには確固たる立つべき土台がありますか。**

牧者は自分がどこにいるのかということを明確に把握していなければ、羊達を遠方の緑の牧場までたずさえいくことができません。とっさの判断をしなければならぬ時、彼らは自分が立っているところがしっかりとしているから確実な判断を下すことができるのです。私達は「我、ここに立てり」というファンデーションを持っているのでしょうか。今日と明日とでは寄って立つ所が異なる。そんな者の後についていくということは何と心頼りないことでしょうか。

**4) あなたには恐れがありませんか。心配がありませんか。**

私達は恐れに支配されやすい者です。恐れが私達の心にありますとそれが私達の言動の動機となります。そして私達の心にはあのこと、このことと常に心配があります。恐れと心配は私達の心から平安を奪って生きます。喜びが失われていきます。恐れと心配をもつ牧者の後に従う羊のその恐れと心配は感染していくことでしょう。

## 5) あなたは将来を見通すことができますか。

私達は自分が選んだ道がどこに向かっているか分かるでしょうか。今日の決断が明日の私達をどこに導いていくのか分かりますでしょうか。自分や家族に半年後、何が起きるのか見通すことはできませんでしょう。先回りしてことごとく問題を回避するなんてことができる牧者は私達の間にはいないのです。

もし、皆さんがこれらの5つの質問に対して胸をはることができるのなら（ちなみに私はそのような人に出会ったことはありませんが・・・）、自らの牧者として生涯をそのまま継続されればいいでしょう。しかし、もし皆さんが「牧者であろうということに行き詰っている」のでありますのなら、また「わたしはこの事についてよくよく考え直さなければならぬ時にきていると思う」というような方がおりましたら、ダビデが勧める「主はわたしの牧者」と言われる「牧者」を己が牧者として人生の旅路を歩き始めてみませんか。

人はこのことは「自分の弱さを認めることだ」と言うかもしれませんが、それは違います。その時、私達は「人、本来の姿に神様によって気がつかされた」のです。私達が真実な自分の姿を知れば、自ずとそこには主がいてもらう以外にないだろうというところに私達は導かれていきます。その時に「主はわたしの牧者」という生涯が始まるのです。

このダビデの詩篇23篇は「主はわが牧者」という言葉で始まりますが、これももし「私はわが牧者」となるならどんな詩になるのか考えてみました。

わたしはわたしの羊飼いです。わたしは一生懸命なのですが満たされることがありません。わたしはあのこと、このことを手に入れたり、優秀なカウンセラーに話を聞いてもらっていますが、「これでいいのだ」という魂の憩いをいまだに見出すことができません。時に死の陰の谷を歩かなければならない時が私にも家族にも来るのではないかという恐れが私を取り囲み、眠れぬ夜を過ごすことがあります。加工食品に含まれている成分から、不意に襲ってくるかもしれない病まで、わたしはあらゆる災いを恐れながら生きています。それらを未然に防ごうとするのですが、到底、私の力はおよびません。会社の会議に出れば私は敵に囲まれ、日々の奮闘にもかかわらず、家に帰っても安心して心の重荷を下ろすことができません。私は数多くのサプリメントを口に放り込み、私のジャックダニエルは夜な夜なあふれています。まことにわたしの命の日の続く限り、渴きと心配と恐れとがわたしを追ってくるでしょう。

ダビデは気がついていました。羊は決して自分の牧者とはなれないのだと。彼らが満たされるために必要なのは彼らの先頭を立てて彼らを守り導いてくれる牧者なのだ。そして、それは全く人間にもあてはまる。我々はそもそも牧者とはな

りえないものであり、我々の牧者になりうるお方は主だけなのだ。そして、その関係が私達の間で確立される時に、私達の心身は満たされ、私には乏しさがないと。

ところでダビデが言うところの「乏しいことがない」とはどういうことなのでしょう。 「乏しい」と「乏しくない」ということの境界線はどこにあるのでしょうか。 マックス・ルケードというクリスチャン作家が興味深いことを書いています。

**多くの人は牢獄にいる。** そう、そこは人で溢れかえっている。時々、そこから出所する人がいるが、その人はまたすぐに帰ってくる。 そう、ほとんどの人は終身刑が言い渡され、生涯、その牢獄にいる。もしかしたら私もあなたも今、その牢獄の中にいるかもしれない。

その牢獄の門の入り口にはその牢獄の名前が掲示されています。 そう、その名前は「欲望刑務所」。 その囚人は欲望を抱き、もっと大きなもの、もっといい場所、もっと素敵なもの、もっと薄手のもの、もっと光沢のあるもの、新しい仕事、新しい車、新しい配偶者を求めている。 そして彼らが堅く信じていることはそれらを手にさえいれば自分は幸せになれるという思い。 彼らはそれらを手に入るとそこから出所するのですが、大抵はすぐにまた何かにか心がとらわれて戻ってきます。 あと一つ与えられれば、あと一度、配属さえ変われば、あと一回、表彰されれば、最後にもう一度、自分のセルフイメージを変えることができたらと、そこを出たり入ったりします。

もしわたしたちの幸せが何かを預けたり、運転したり、飲んだり、消化したりすることによるということになっているのなら、私達はきちんと向き合わなければなりません、自分は牢獄にいるということに。

「主は私の羊飼。 わたしには乏しいことはない」。ここに記されている「乏しいことはない」という「乏しさ」とは私達が願い求めているものがことごとく与えられるということではありません。 我々の牧者は当然、知っているのです。 私達はそんな牢獄にいるような者ではないということ。 私達の牧者は欲しているものが与えられるということが私達の乏しさからの解放だとはこれっぽっちも考えていないのです。

今日、もしそんな牢獄に捕われている方がおりましたら、いつもそんな牢獄を出たり入ったりしている方がおりましたら朗報が一つ。 その朗報を皆さんに知っていただきたいのです。 それは今日、お話している「主」が獄におる私達に今日も面会に来ているということです。 私達は名前を呼ばれ、面会の小部屋に行きます。

主はそこで私達を待っています。そして「今日はとっておきのことをお話しします」と私達に一言、言われるのです。

**「主はわたしの牧者。わたしには乏しいことはありません」。**

もし私達が己が牧者を主と定めて生きていくのなら、私達は乏しいことはありません。それは私達がミリオネアーになるということではありません。私達が言うところの「乏しさ」と牧者なる主が言うところの「乏しさ」とは全く異なるものなのです。私達は得れば得るほど渴く者であるということは牧者なる主は知っておられるのです。そして、それは決して満たされることはないのです。この牧者なる主と出会うまでは・・・。

イエス・キリストはかつて「わたしはよい羊飼いである」（ヨハネ10章11節）と言われました。そして「わたしが来たのは羊に命を得させ、豊かに得させるためである」（ヨハネ10章10節）と言われました。

聖書、ヨハネによる福音書は、このイエスの言葉がある女性の人生に成就したことを記録しています。彼女の名前は聖書に記されていませんが、私達は彼女をその出身地から「サマリアの女」と呼びます。かつての彼女の魂は渴ききっていました。彼女はまさしく牢獄を出たり入ったりしていました。そう、彼女は五度、結婚し、五度、離婚し、そして彼女がイエス様と出会った時、彼女には夫ではない男がおりました。

そんな女がイエス様と出会いました。彼女はそれまで何の疑いもなく自らの牧者として生きていました。他の生き方があるということを彼女は知らなかったからです。誰も別の生き方があるなんて彼女に話してくれなかったからです。しかし、イエス・キリストが彼女と出会いました。イエス様は彼女が身の上を話す前から彼女がそれまで歩んできた人生をその心に読み、彼女のうちに誰も癒すことができない渴きを見て取り、彼女に語りかけるのです。

**『この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう』**（ヨハネ4章13節、14節）

「主はわが牧者」と生きる。それゆえに「私には乏しいことはありません」ということは「わたしが来たのは羊に命を得させ、豊かに得させるためである」と言われる主が永遠の命に至る水、命の泉を私達の心にわきあがらせてくださるということです。その時に私達はもはや誰が決めたのか、間違った基準で自分は乏し

い、乏しくないということを判断して人生を振り回す必要はなくなるのです。イエスを牧者として生き、それゆえに私達の心から永遠の命に至る水が湧きあがる

時、その命の泉が心に与えられる時、私達は本当の意味でわが生涯、乏しきことなしとすることができるのです。マックスルケードはあるキリスト者と牧師の会話を書き残しています。

ある人が牧師を訪ねてきました。彼は言います「私は何もかも失ってしまいました」彼は嘆きました。「ああ、それはおつらいでしょうね。信仰がなくなってしまったなんて」。「いや」彼は牧師の言葉を正しました「信仰はなくしていません」。「では、人格を失われたのですか。なんともお気の毒に」。「そうは言っていないよ」彼は訂正した。「今も私自身は何も変わっていません」。「それじゃ、神の救いを失われたのですね。実にお気の毒です」。「そんなことは言っていない」彼は言いかえしました「私は神の救いを失っていません」。牧師は答えます「あなたにはご自分の信仰と人格と救いがあるのですね」牧師は続けます「わたしにはこう思われます。あなたは本当に大切なものは何一つ失っていません」。

わたしたちの心に牧者なるキリストが与えてくださっている命の泉があり、そこから永遠の命の水が湧きあがっている限り、私達には乏しいことはありません。「主はわたしの牧者である」ということ、この一言が私達の人生を劇的に変えます。今日、このところにこの決意をあらためていらっしゃる方達がおることを心から願っております。お祈りしましょう。

文中の参照文献：「心の重荷に別れを告げて」（いのちのことば社、マックス・ルケード）